

干拓地の入植集落における民俗の生成について

—滋賀県琵琶湖大中の湖干拓地の事例から—

橋本 章 *

HASHIMOTO Akira

Formation of Folklore in the Villages Developed on Reclaimed Land

From Case Examples of the Reclaimed Land
from Lake Dainakanoko, Shiga Prefecture

This paper studies the process of folklore formation in new villages on reclaimed land, using case examples from the villages developed in the 1970s on former Lake Dainakanoko in Shiga Prefecture. Since these villages are rather new, information was readily available from first-generation settlers, providing us with interesting data for similar studies. This paper especially focuses on the state of foundation and beginnings of shrines and festivals, both of which have functioned effectively as bonds connecting people in the same community. Previous studies have shown that cultures were transferred to new villages from settlers' places of origin. Case examples in this paper, however, indicate that lifestyles and cultures are not transferred in an integrated fashion, but settlers select what to accept according to the circumstances. They also show that settlers tend to attempt to convey the story of hardships they experienced to the following generation in an easy-to-understand manner, while eliminating inconvenient facts in the process.

キーワード：民俗の生成 開拓村落 神社の創建 祭礼の導入

* 京都文化博物館

1. 近代開拓村落の民俗に関する先行研究

近代以降の村落の開拓に関する研究は、歴史学や地理学をはじめさまざまな分野によって取り組まれてきた。近代の開拓村落は、北海道において国策として展開された屯田兵などによる士族授産の一環として開発された村々の事例に見られるように、近世に幕府や諸藩や豪農などによって行なわれた新田開発によって成立した新村とはその背景において一線を画する事例が多く、また村の成立の過程や入植者のルーツの探求が可能な事など、生活文化の成り立ちに関する様々な興味深いデータが得られる対象でもあった。

民俗学的な視点からも開拓村落へのアプローチは試みられてきた。例えば宮本常一は、民衆の歴史の一コマとしての開拓の歴史について「開拓立村の条件はそれぞれの土地、それぞれの時代・政治・社会情勢などで様でなく、それぞれの時代を反映する。その反映したゆがみがいつまでもゆがみとして荷としてのこっていくものである」[宮本 1963: 1]として、開拓の歴史を振り返ることの意義を見出そうとしている。また明治維新以降の開拓村落についても言及し、青森県下北半島斗南丘や津軽農牧社、そして北海道の開拓などの例を挙げつつ「明治にはいつの開拓には国家権力を最高のもとし、国家発展を名として民衆に大きな犠牲を強いた。これにたえ得ないものは滅亡するよりほかに道がなかった」[宮本 1963: 226]と述べて、近代の開拓事業から批判的に学ぶ姿勢を示している。

近代開拓村落の研究に関する豊富なデータの蓄積がみられるのは、明治時代になって開拓使が置かれ国の施策としての開拓事業が実施された北海道をフィールドとしたものであるが、民俗学の立場からの視点は、主に北海道への入植者が持ち込んだ伝統文化をめぐってのもので、その解析には、入植者の出身地（母村）をたどってそこに残る生活文化と北海道の入植地のそれとを比較し、その分析を行なうという手法がとられた。これに関して例えば宮良高弘は、開拓村落はその歴史がまだ浅いため「生活文化各要素が、どの母村（出身地）からもたらされたかがより具体的にビビッドに把握できるから」[宮良 1992: 6]として、この方法による北海道各地における民俗の生成を分析する有効性を説く。

宮良はまた「北海道は伝統的社会とはかなり異なった環境下におかれた歴史を持っている。この環境とその変化は生活文化に規定的影響を与えるとともに、人々のこれからの環境への働きかけによる適応・克服によって生活文化は再生産・再創造される。現代の激しい生活文化の変貌はこうした点からの説明なくしては語れない」[宮良 1992: 16]とその特殊性を述べ、「もともと北海道地域社会は、伝統的社会からの移住者によって形成された人為的社会であって、彼らは開拓村落社会の形成過程を通して北海道において「いえ」や「むら」の再現を図ってきたのである」[宮良 1992: 19]として、北海道の開拓村落における民俗の生成が、入植先の環境にある程度影響されながらも、そこに根を下ろそうとする人びとが伝統的社会から持参した諸片を元に生活文化を再現しようと試みてきた結果であることも指摘している。

宮良の研究は、生活文化の母村との比較検討を軸とした分析手法をとることで、その継承あるいは変容の様相を追うことができ、一般的な民俗の生成過程を探るモデルとしても有効であると思われる。これに関して椿真智子は「主体の人間に根ざした研究の流れは、開発村落の入植者自らが自己の経験や家の歴史を再認識し、再評価しようとする動きとも呼応していた。開発村落で

は、自己の経験とそれを包含する村落社会の歴史的過程を比較的たどりやすいことから、人間の主観的意識や経験を分析資料として活用できる可能性は大きい」[椿 1996: 35] と評価する⁽¹⁾。

これに対して、明治初期に京都府の窮民救済事業として開拓が始まった南山城村童仙房の事例から、開拓地の伝承文化について検討した前野雅彦は、「開拓村落のように、世代や歴史によって積み重ねられた口承伝承や所作伝承をもとに形作られたいわゆる民俗資料としての伝承を持たない地域においては、そこで得られる資料が民俗資料として資料化される根拠が失われ、それがためにその地域において得られる民俗資料によって分析できる対象としてのムラとして認識できなかったのではないか」[前野 2006: 3] と述べて、開拓村落の民俗調査を進めるにあたって母村の事例との比較検討に主眼を置くのではなく、成立した村落そのものに生成された民俗にまなごしを向けるべきであると主張する。前野は「開拓地において「記録化された伝承」はこのように開拓の経験を持たない世代に開拓の記憶を伝え、それを「共有化」し「再生する」ことができるのであり、まさに開拓地において共有化・再生された生活事象こそが、その地において世代を超えて形作られていく「民俗」となっていくのである」[前野 2006: 27] として、開拓村落そのものに定着した民俗を資料化することの重要性を指摘する。前野の主張では、伝えられた村の歴史や生活様態をすべて「伝承」という言葉で包括してしまっているために、その指し示すものが必ずしも明確ではない点に難があるのだが、既存の民俗学が眼を向けてこなかった新興の村落の民俗について言及した点は注目される。

近代以降に新しく成立した村落については、村落の歴史的蓄積が薄いこともあり、これまで民俗学では必ずしも積極的には研究されてこなかった。しかし、近代開拓村落に関する先行研究から導き出されているように、民俗が伝播しあるいは生成されてゆく過程や、そこでの地域の人びとの伝承文化に関する実践の様態を明確にしやすいという利点がある。そこで本論では、より新しい戦後に成立した集落の事例研究を試みる。

具体的には、滋賀県の琵琶湖東岸に位置し、かつて大中の湖という内湖であった地帯を干拓して出来上がった大中の集落を取り上げる。大中の湖干拓地は、昭和 32 (1957) 年から干拓事業が本格化し、昭和 41 (1966) 年に最初の入植が始まっている。行政的には近江八幡市と東近江市にまたがり、入植開始時点では近江八幡市と旧安土町(平成 22 (2010) 年に近江八幡市と合併)、そして旧能登川町(平成 18 (2006) 年に東近江市に編入合併)とのそれぞれの地先に、各 1 か所ずつ計 3 つの集落が形成されている。以下本論では、大中の湖干拓地における入植と新村創設の経緯と、そこに新たに神社が勧請され祭礼が実施されてゆく過程を記述し、戦後に新たに生まれた集落において、どのように神社の祭礼が生成されていったのかを明らかにする。

なお、開拓村落という呼称は研究史的には近代の政策の影響で成立した村落に用いられており、本論で対象とする昭和 40 年代成立の干拓地村落とは、共に国家政策の影響下にあったとはいえ、その成立背景を異にするものと思われる。そこで本論では、対象の呼称を地元で用いられる集落という言葉に便宜的に統一する。ただし、新興地における民俗の生成過程の検証という本論で設定した課題に則り、近代開拓村落を対象とした研究成果も本論に適宜照射してゆく。

2. 干拓地に生まれた新しい集落の民俗事例について

(1) 大中の湖干拓事業と集落の成立

大中の湖は琵琶湖の東岸の蒲生郡地先にあった内湖で、面積約 15.4km² と琵琶湖最大の内湖であった。昭和期の干拓事業によってその姿は消滅し、現在は近江八幡市と東近江市にまたがるおよそ 1.124ha の農地となっている⁽²⁾。

大中の湖干拓事業は、終戦後間もない昭和 21 (1946) 年に、国の緊急食糧増産計画に基づいて、国営事業としてその計画が開始された。同年 2 月には京都農地事務局琵琶湖干拓建設事業所が組織され、翌年に琵琶湖干拓事業は農林省の所管となった。昭和 25 (1950) 年には同省から滋賀県知事に対して埋め立ての申請がなされ、知事は昭和 27 (1952) 年 3 月にこれを承認している。大中の湖の干拓に際しその目的とされたのは、昭和 21 年に制定された自作農創設特別措置法に基づく自作農の創設と維持であった。その後、干拓事業計画は技術的な面や周辺農漁村への補償問題などを含めた幾度かの変転の末に、昭和 32 (1957) 年から干陸工事が着手された。

そして昭和 39 (1964) 年には一部の陸化が完了し、翌年には近畿農政局から「国営琵琶湖干拓事業干陸計画書」が発表され、土地の分配や営農計画などが示された。滋賀県はこれに基づいて同年 6 月に「琵琶湖干拓大中の湖地区新農村建設計画・集落構成計画」を作成し、入植戸数を 216 戸とすることや、集落を北部（旧能登川町栗見新田地先）・南部（旧安土町下豊浦地先）・西部（近江八幡市白王町地先）のそれぞれに配置すること、そして営農類型からの共同単位 8 戸を基本単位とし、9 つの協業体からなる 72 戸を 1 集落の農家戸数とすることなどを示した。この方針は集落の成立まで受け継がれ、大中の 3 村の基礎構成要素となっていた。

入植希望者に対しては選考が行なわれたが、滋賀県が昭和 40 (1965) 年に示した入植者の選定基準には、「将来にわたって自立経営農家を確立するための旺盛な営農意欲を有すること」や「年齢は 20 歳以上で、干拓地における労働に耐えうる健康体であること」、「原則的に営農可能な労働力 1.8 人以上を有すること」、「地区内集落に移住し、住宅その他の新築を実施すること」、「150 万円以上の自己資金の準備」など 10 の項目が掲げられた。またこの選定基準には、入植後はそれまで有していた土地財産を手放すことも求められており、入植者は新農村建設成功の為に不退転の決意で臨むことが必要とされた。

選考の結果、北部・南部・西部それぞれの集落への入植者が決まったが、各集落では入植者の出身地域に関して差異が出た。北部集落では、入植者の 9 割程が旧能登川町の出身者で占められ、しかも半数以上にあたる 48 戸が北部集落に隣接する事になった栗見新田の出身であった。栗見新田は江戸時代の寛文 12 (1672) 年に当時の彦根藩により開拓された新村で、愛知川の堆積土によって形成された土地を利用してつくられたものであった。栗見新田では、世帯の 3 割が大中に入植

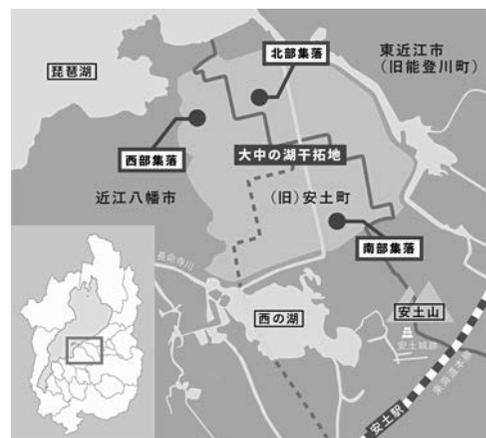


図 1 大中の湖干拓地概略図

してしまったため隣保の再編成が行われた⁽³⁾。

南部集落への入植者は、半数が隣接する旧安土町からの出身者であった。それ以外では大津市や滋賀県の湖西、湖北、湖南、湖東の各地からの入植者が3分の1強を占め、残りは岐阜県や兵庫県や奈良県などの出身者であった。そして西部集落では、全体の約7割が隣り合う近江八幡市からの入植者であった。ほかには滋賀県内各地からの入植者が3分の1で、あとは兵庫県や奈良県の出身者であった。

大中の湖干拓地の集落は、隣接した3つの自治体の地先のそれぞれに建設されたが、近江八幡市出身の者には近江八幡市地先の西部集落への入植が斡旋されるなど、入植者は近接した市町の出身者ごとに多くが振り分けられた。図2は山野明男が平成9（1997）年に実施した調査データの数値を元にして、集落ごとの入植者の出身地の割合を筆者が図化したものであるが、そこには各集落における構成戸の出身による偏りを見てとることができる。

さて、その後干拓事業の推進と共同施設の建設などと前後して入植が開始された。昭和41（1966）年度入植者は北部集落が72戸、南部集落が70戸、整備の遅れていた西部集落には11戸の合計153戸が入植し、残る63戸は翌年の入植と決まった。南部集落には昭和41年に住宅39棟がまず建設されて翌年の5月から入居が始まった。北部集落では昭和42（1967）年に住宅72戸が建設された。西部集落には昭和41年にまず11戸が入植し、残る61戸は翌年に入植したが、住宅の建設は昭和43（1968）年になってからで、入植者が実際に住宅に移転したのは昭和44（1969）年からであった。住居環境が整うまでの間、近隣市町出身者は郷里の村々から通いで開拓作業に従事し、遠隔地からの入植者は近在の農家の納屋を借りるなどして急場をしのいだという。

入植当初、各集落には協業体が組織された。協業体は複数戸が共同で営農作業をおこなう形態で、ひとつの協業体は8戸で構成され、北部・南部・西部の各集落に都合27の協業体が誕生した。協業体は経営効率の向上を目的としていたが、その編成には良好な人間関係を重視することや年齢構成を平均化することなどが意識されたほか、米・畜産・園芸など営農志向を同じくする者同士を組ませる事や、過去に他所で入植を経験した者がある場合はその経験を活かしつつ団結心を強固にするために協業させる、といった方針がとられた。しかし、この協業体は入植の2年目から徐々に解体されてゆき、各農家の経営が軌道に乗りはじめると4年目にはほぼ全ての協業体が解体された。そして、協業体として構成された各集落内の8戸ずつの組織は組と呼称されるようになり、地域社会の最小単位として機能してゆく。

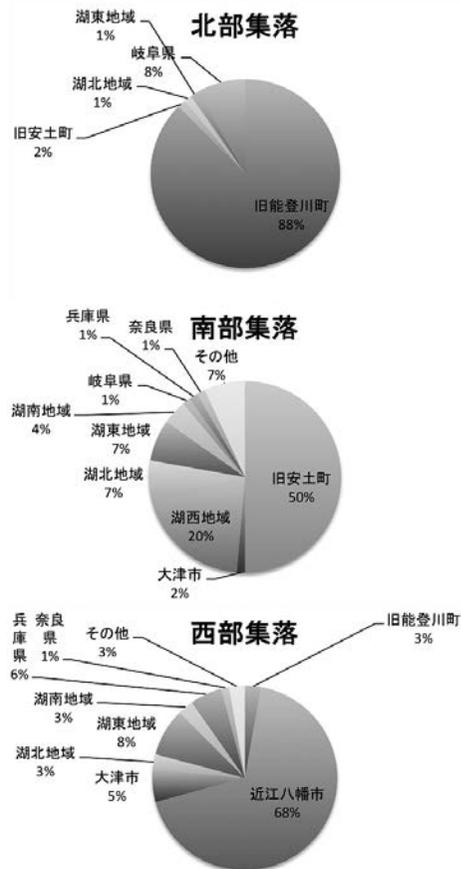


図2 大中の湖干拓地各集落への入植者出身地
山野 [1999] 論文をもとに筆者作成

（2）大中の湖干拓地の各集落における神社の勧請と祭礼の実施

大中の湖干拓地に形成された3集落には、北部集落に大中の湖神社、南部集落に大中神社、西部集落に大中神明宮とそれぞれ神社が建設されている。神社の造営は当初の干拓事業には計画されていなかったものだが、各集落の発意によってこの事業はなされた。各神社の建設時期や勧請された祭神などはおのおので異なるのだが、入植者が神社施設を欲したという点は共通している。

北部集落では、入植開村の翌年である昭和43（1968）年に、他の2集落に先駆けて神社の建設が開始された。北部集落は入植者の大部分が近隣の旧能登川町出身者で占められており、しかもその大半の48戸が干拓地に隣接する旧能登川町栗見新田出身であったことは先に述べたが、このことは神社の建設についても少なからず影響を及ぼしていると思われる。

北部集落に建設された神社は大中の湖神社と名付けられた。この社には天照大神を含めて四柱の祭神が勧請されているが、うち一柱は日吉大神（大山咋神）で、これは大津市坂本の日吉大社からの分神を勧請したものである。これは北部集落への入植者の郷里である栗見新田に氏神として祀られているのが同じ祭神を祀る日枝神社であり、その縁が大きいのだという。

そして、さらに特徴的なのが、同じく祭神として祀られている角凝魂命と天湯川術命についてである。大中の湖神社建設当時、栗見新田の北を流れる愛知川の上流では永源寺ダムが建設中であり、その影響で、愛知川上流の数集落が水没することが決まっていた。水没地区のひとつである萱尾の集落には大瀧神社が祀られていたが、同社は愛知川流域の愛知・蒲生・神崎の三郡159カ村の湯水の神として信仰されてきた。北部集落では、大中の湖神社建設にあたって水没する大瀧神社のうち境内社の春日社の社殿を譲り受けたいという話が持ち上がり、その縁故から大中の湖神社の祭神として大瀧神社の祭神の角凝魂命と天湯川術命を分祀して勧請したのである。昭和44（1969）年、集落竣工記念日に合わせ3月8日に大中の湖神社の竣工式が行われた。前日の深夜には公民館に設置されていた仮宮から祭神が本殿に遷座された。以後北部集落では、毎年この日に春季例大祭を実施している。

一方南部集落には、集落開村後10年を記念して昭和51（1976）年に大中神社が創建された。神社の建設に際しては昭和48（1973）年に行われた伊勢神宮内宮式年遷宮の際の古材を拝戴したものが用いられた。大中神社の創建にあたっては、地元である旧安土町の有力な神社である沙沙貴神社の宮司の助力があり、大中神社の祭神には、天照皇大神と豊受大神に加えて沙沙貴神社の祭神である少彦名命が祀られている。また昭和56（1981）年には、同じ旧安土町内で、大中の湖干拓に先駆けて干拓と入植が実施された小中の湖干拓地で、昭和21（1946）年に開村している芦刈地区の住民を大中神社の氏子としており、昭和60（1985）年には芦刈地区に御旅所が設けられ、例祭には神輿が神社とお旅所の間を巡行するようになった。大中神社では、春の例祭が毎年3月27日と28日に行われている。なお、南部集落における大中神社創建に関しては、集落内で氏神勧請に対する反対意見があったことが川口幸穂によって報告されている。川口の報告では、反発の背景には入植者の出身が多岐にわたることがあり、協議を重ねた結果、大中神社は南部集落を代表する地域の氏神として祭ることによって一致を見たのだという〔川口1983:8〕。

また、西部集落でも入植10年を契機とした神社建設の機運が高まり、昭和50（1975）年8月に集落の臨時総会が開かれて神社建設が決定した。そして同年10月31日には、式年遷宮後の伊勢神宮外宮豊受大神宮撰社大河内神社の古材を受けて、社殿が着工されることとなった。神社を創設する背景としては、入植後数年がたって集落としての一体感が薄れてきたことや、子ども達

が地元で祭りのないことに寂しさを感じていたことなどの理由があったとする⁽⁴⁾。そして、翌昭和51年3月には神社名を大中神明宮と定めて、天照皇大神の御霊代を遷座し、28日に鎮座祭を行なった。その後、昭和52(1977)年には例祭に出座する大太鼓を購入、昭和56年春には伊勢神宮外宮から豊受大神を迎え入れ、二柱が祀られることとなった。大中神明宮では、例年3月の第4土日曜日に例祭が催され、大松明が出る宵宮や大太鼓が巡行する本祭りが賑やかに行われている。



写真1 西部集落(近江八幡市大中町)春祭の松明奉火

滋賀県の湖東地域では、大きな松明の奉火を伴う祭祀の濃密な分布が見られるが⁽⁵⁾、大中の湖干拓地でも、北部・南部・西部のそれぞれの集落において松明奉火を伴う祭礼が実施されている。

例えば大中神明宮の春祭では、入植当初は松明を奉納するような祭礼もなく、神社創建後も数年間は樽神輿を2基から3基出して集落の中を練りだすだけのものがあったが、昭和52年に蓮台に搭載して神輿のように練りだすための大太鼓を製作し、また翌年からは境内横の広場に巨大な松明を製作して奉納するようになった。西部集落の松明は、当時入植者の出身地として最も多かった近江八幡市白王町で伝統的に催されてきた祭礼での松明の作り方を手本に導入されたという。当初西部集落では、9つの協業体ごとに1基ずつの松明を製作した。最初の頃の松明は高さが6m強もある大きなものであったが、西部集落には特有の強い湖風が吹いて松明が倒れたり火がビニールハウスに燃え移ったりする危険があることから、最近ではその高さも3m以下に抑えられている。その後、3つの組(協業体から改称)が共同で1基ずつの松明を作るようになり、今では松明の数は3基になっている。またこれらの松明とは別に、中学生から25歳くらいまでの男性で組織される青年団が担いでお渡りをする引きずり松明と呼ばれるものを1基作る。また境内の一角には、松明を製作する際に出た材料の残り物を円錐状に積み上げた大松明も配置される。

大中の湖神社を擁する北部集落、そして大中神社をもつ南部集落においても、春季の祭礼が年中行事の中で最も華やかな祭祀内容を有している。そして大型の松明を製作して境内に奉納し、宵宮の晩にこれに奉火をするという儀礼が見られる点も、規模の差こそあれ共通している。

3. 大中の湖干拓地の事例を調査した先行研究の視点の検討

以上、大中の湖干拓地に展開した3集落について、集落の成立過程と神社の創建および祭祀の展開の様相から概観した。元々大中の湖干拓地に計画された集落は、自作農の創設と維持を目的とした国や自治体の施策に依拠したものであり、協業体の組織化など近代的な農村モデルの構築を目指すところにその志向があったが、個々の農家の経営が軌道に乗る事で協業体は早くも解消されてゆき、周辺の集落と同等の地域社会の最小単位である組として存続するに留まった。また、当初計画の中には組み入れられていなかった地域内への神社の建設という事態が各集落共に入植後10年以内に顕在化し、またそこでは祭礼が催されるようにもなった。集落成立からおおよそ半世紀が経過した現在、大中の各集落には、集会所があり神社があり家々が軒を並べて建って

おり、計画的に整備された街区の状況というものはあるにしても、周辺の伝統的な村々とさして変わらぬ景観を有している。大中の各集落が干拓地にわずか50年前に誕生したものであるという予備知識がなければ、そこには立派な集落が存在するように見えるだろう。

さて、大中の湖干拓地の集落展開に関しては、これまで地理学の分野からの研究が進められてきたが、その観点は主に営農を主眼とするものであった。例えば高橋正明は、入植後10年余を経た大中の湖干拓地について、特に南部集落での農業経営の変化を調査し、入植した農家の営農の状況と出身地との関係に着目し、地元の旧安土町からの入植者ではなく開拓地村落からの再入植者が、農業経営発展の原動力となったことを指摘する。高橋は「大中の湖新農村の営農は、その担い手の面から考察すると、気力のある少数精鋭の農家によってリードされ、発展してきた」と述べると共に、一方の地元出身者が営農に対する意欲が乏しく、その結果が集落内の格差となってあらわれ、入植者間の仲間意識の崩れにもつながっていることを指摘している〔高橋1981: 181〕。また新信二は、南部集落は入植者の出身地にばらつきがあるため集落としてのまとまりに欠けるが、3集落の中でいち早く協業経営から個別経営へと転換した事を踏まえて、営農に対して自発的積極的姿勢を有していたと分析し、同郷者が大半であった北部集落は、まとまりは良いが新しい経営技術を取り上げることに極めて消極的である、そして西部集落については、入植者の年齢層が他の2集落とくらべて若いことから、まとまりは良いものの計画性に乏しいとの指摘のあることを披露している〔新1983: 3-4〕。

これらの観点は、入植者の志向が出身地によって左右されるという論理の上に立ったものであり、こうした言説を受けて山野明男は、「干拓地農業は新規に形成されるために、伝統的・慣習的制約が少ない。したがって、干拓地農業の展開は主として入植農家の干拓地への適応の仕方に規定され、異なった文化的・社会的属性をもつ入植農家が新しい居住地へ移住することにより、その環境に適応した営農を展開することになると思われる」〔山野1999: 1〕との見通しを立てる。

確かに、入植者の出身地構成による各集落の志向性の違いやその後の展開の差異については、大中の各集落で聞き取りをした際にはほぼ必ず採取する事ができた語りである。しかしそれは、話者の内面で納得された集落の歴史の展開過程と結果の説明原理という側面も併せ持つ。

また、各集落に神社が建設され祭祀が創始されるという経過は、営農からの観点のみで計画されていた干拓地の展開からは異質な要素であったが、これに関しても入植者の出身構成によってその関係性を読み解く手法が採られた。

大中での神社創建の経過は3集落のそれぞれで異なり、北部集落が大半の入植者の出身集落の神社景観の入植地への復原を志向したのに対して、南部と西部の集落では、入植後数年を経て集落としての求心力が低下したことへの危機感から、神社建設が希求されたことが謳われた。こうした現象を櫻井治男は「心のよりどころ」としてのムラの神、鎮守の森への希求」という言葉を用いて説明する〔櫻井2010: 270〕。ただそれは一方で社殿の建設と祀られた祭神の性格だけで各集落の性格付けをおこなったに過ぎないのであって、近代化以降整理され体系化された神社のあり方からすれば、祭神と村落の立地状況とを法則的に捉え、それを立村意識の顕在化と見る一面的な解釈であると言えよう。

大中の湖干拓地に誕生した3つの集落の入植者には、それぞれの近隣地域からの出身者が比較的多数を占めたが、より広範な地域からの入植者も少なからず含まれていた。そうした中で当初の開拓計画には含まれていなかった神社の建設が3集落それぞれで内発的に行なわれたのである。

勧請された各神社では、祭神などの決定にあたって多数派の入植者出身村に近い性格のもの

が導入された。例えば北部集落では、出身者が最も多い栗見新田の氏神と等しい祭神が祀られ、また栗見新田で水利関係のあった地域の水神が分祀されている。一方で南部集落では、実際には多岐にわたる入植者の中で神社創建にあたっての対立があり、合意に至るまでにさまざまな協議を必要としている。

そして、地元には祭りがなかったことが地域的課題となっていた3集落では、いずれも神社建設ののち祭礼が実施された。大中を含む滋賀県湖東地域における祭礼の実施は春季が最も盛大に行なわれており、3集落においても春に規模の大きな祭礼を行うというスタンスが踏襲された。また近江八幡市域を中心に広範な分布を見る大松明の奉火という儀礼も3集落全てが取り入れており、その共通性が指摘できる。松明奉火は材料の調達から製作手順まで極めて複雑な知識の伝承を必要とする儀礼である。その導入に関して、例えば入植者全体の7割を近江八幡市出身者が占める西部集落では、近在の近江八幡市白王町からの入植者がその伝承を伝えたとする言説が残る。ただしその祭礼も近江八幡市域からの単純な移植ではなく、入植地の環境に合わせた大きさの変更や、協業体などの生活条件に適合するかたちに変更がなされている。

このように、神社の建設から祭礼の導入に至るまでの道程は、各集落における選択の積み重ねであることが指摘できる。確かに結果だけを見れば大中の各集落における神社や祭礼の導入にはより多数派出身者の母村文化が反映されたように見える。しかし、各集落では状況に応じた選択がなされてきており、その結果が地域の民俗の生成へとつながっているものと思われる。

4. 新たに成立した集落の神社祭礼にみる民俗の生成について

以上、滋賀県の大中の湖干拓地に誕生した3つの集落について、入植から営農組織の結成と展開と、神社の創建から祭礼実施の様相までを中心に見てきた。戦後の食料増産と自作農創設を目的とした国策として始まった大中の湖干拓事業と入植では、そこに根を下ろした人びとによって着実に集落が建設されてきたが、その後の社会情勢の変化や在地の事情によって当初の目測から幾度となく変更を余儀なくされてきた。本論の冒頭で引用した宮本常一が開拓村落について述べた言葉を裏付けるかのように、大中の経てきた道程にもまた時代が反映され、状況の変化とともにある種のゆがみが蓄積されてゆく様子がみられた。そのゆがみの克服をめざして、大中では協業体が生活実態に即して再編され、神社が建設され、そして祭礼が導入された。

大中の湖干拓地の生活に関する地理学などの先行研究からは、入植者の出身母村によって集落の営農に対する志向性に違いのあることがほぼ等しく導き出されていた。また、神社の創建や祭礼の導入についても、より多くの入植者を輩出した出身地の文化の影響が色濃くみられた。こうした結果は、北海道の開拓村落と開拓者の出身村の生活文化とを比較検討してきた宮良の研究などにあるように、人為的社会に参入した伝統的社会からの移住者が、自身の持参した生活文化をそこに再現したとする、従前の民俗学の成果と軌を一にするところではある。

しかし大中の事例では、各集落の入植者が多様な出身地で構成されているということがあり、その実勢は単純にひとつの母村文化が転写されたという状況ではないことがうかがえた。その点が明治期の開拓村落研究が対象としてきた事例とは異なる性質である。本論で報告した大中の3集落における神社の創建から祭礼の導入までの過程では、より多数を占める近隣からの出身者の持ち込んだと思われる要素が導入されてはいた。だが、その状態を出現させるまでには、入植

者達はさまざまな可能性の中からその都度選択をして生活文化を形成していった過程がみえてきた。つまり、戦後に開拓された大中の集落の民俗は、単に出身地の再現ではなく、入植者たちの協議と選択のうえに新たに作り上げられていったことが明らかとなった。

本論では、戦後に開拓された集落を事例として、そこへの入植者の動向を神社の創建と祭礼の導入という事象から見てきたが、このような人びとの選択の過程に焦点をあてることで、民俗をより動的な過程としてとらえることが可能になるものと思われる。

では最後に、明治期の開拓村落研究と本論で述べた戦後の開拓村落の事例との間の差異は何を示すのかについて、若干の見通しを述べておきたい。

明治期の開拓村落研究で指摘される人びとによる歴史の再認識や記憶の共有化といったプロセスは、大中の事例では未だ平板なものではない。しかし、大中に暮らす人びとからは、自身の村が新しくできたまだ歴史の浅い村であるとする一方で、入植から開墾の苦労やその後の営農転換、そして神社を勧請した際の経緯など相応の語りが採取される。そして、そうした語りは、年月を経てある程度整理された“干拓で生まれた村・大中の物語”へと昇華されつつある傾向を見せている。無味乾燥な歴史的事実を他者が理解しやすい物語へと転換させてゆくためには、心意的情景の脚色や物語の構成上不要となる要素の削除が行なわれる。例えば大中でも、神社創建の際の入植者間の相剋の話は地元の語りからは除かれ、櫻井が述べるような、人びとが鎮守の森を希求したという文脈に揃えられつつある。その意味では、今後大中の各集落は語るべき自分たちのふるさとの物語を獲得し、歴史は再認識され入植の苦労話が次の世代へと受け継がれて、記憶の共有化がはかられてゆくのかもしれない。民俗の生成をより鮮明に捉えるためには、こうした事例を基に地域の人びとの語りの成立と変遷の経過にも目を向ける必要があるだろう。

註

- (1) 橋本は日本における開拓村落の研究を、①拓殖政策論的研究、②景観論的・経済地理学的研究、③社会経済史的研究、④社会構造論的研究、⑤思想・文化論的研究の5つに整理し、民俗学的なアプローチを④および⑤のカテゴリーで位置付けている。
- (2) 大中の湖干拓事業の詳細については次の文献を参照した。社団法人農業開発研究センター 1977『新しい土 新しい人—琵琶湖大中の湖干拓史—』青巧社／大中の湖農業協同組合 1976『大中の湖新農村 10年の実績』／琵琶湖干拓史編さん委員会 1970『琵琶湖干拓史』琵琶湖干拓史編纂事務局。
- (3) 栗見新田干拓の歴史については、東近江市能登川の歴史編さん委員会 2012『東近江市能登川の歴史 第4巻 資料・民俗編』を参照した。
- (4) 西部集落への神社建設に関しては、近畿大学芸学部 2002『近江八幡市 島学区の民俗』を参照した。
- (5) 湖東地域の松明祭りに関しては、近江八幡市教育委員会 1998『近江八幡の火祭り行事』に詳しい。

文献

- 新 信二 1983「「大中の湖新農村」の農業経営」『佛大社会学』8
川口幸穂 1983「新田農村の社会構造と農民生活—滋賀県安土町大中部落の点描—」『佛大社会学』8
櫻井治男 2010『地域神社の宗教学』弘文堂
高橋正明 1981「大中の湖新農村における営農の担い手に関する若干の考察」立命館大学文学部地理学教室・立命館大学地理学同校友会編『地表空間の組織』古今書院

- 椿真智子 1996 「日本における「近代開拓村」研究の成果と課題」『人文地理』48（6）
- 前野雅彦 2006 「伝承される開拓」『日本民俗学』248
- 宮本常一 1963 『開拓の歴史 日本民衆史Ⅰ』未来社
- 宮良高弘 1992 「日本民俗学の展開と北海道」『日本民俗学』189
- 山野明男 1999 「入植農家からみた干拓地農業の展開過程—滋賀県大中の湖干拓地の事例—」『人文地理』51（6）